

祇園祭における四条御旅所をめぐって

本 多 健 一

I. はじめに

京都を代表する祭である祇園祭は、日本の祭礼文化（史）においてもきわめて重要な存在であり、その歴史については歴史学（文献史学）、民俗学、芸能史、美術史、歴史地理学などさまざまな分野からの研究が行われている。代表的なものに限っても、歴史学の立場では中世を対象にした脇田晴子¹⁾、河内将芳²⁾、近世を対象にした川嶋将生³⁾、民俗学ないし芸能史の立場では植木行宣⁴⁾、山路興造⁵⁾などの研究があり、他の京都の祭礼と比べて既存研究の蓄積は群を抜いている。

この背景としては、祇園祭が平安期より一貫して京都において最も注目を集めてきたため、公家の日記などの古記録、『洛中洛外図屏風』などの絵画史料に数多くの記録が残されていることに加えて、同祭を主宰する八坂神社（祇園社、現京都市東山区祇園町）⁶⁾に存する関連諸史料が比較的豊富なためでもある。

ただ、一方で判明していない史実も多い。たとえば中世から近世に移行する時期における祇園祭の変化の問題があげられる。後で詳しく述べるように、安土桃山期の天正19年（1591）、豊臣秀吉による京都の都市改造にともなって、祇園祭の際に神社から神輿が渡御して駐輦する御旅所施設が、従来の大政所御旅所（下京区烏丸通仏光寺下ル大政所町）と少将井御旅所（中京区車屋町通夷川上ル少将井御旅町）の二カ所から、下京区四条通寺町東入ル貞安前之町に現存する四条御旅所⁷⁾に移転・統合されている。神社や祭礼を支える有力な氏子の居住する近辺に設けられ、祭の時期を中心に「神を迎える在地側のセンター」として機能していた御旅所⁸⁾の移転・統合は、祇園祭の形式や内容に少なからず影響をおよぼしたはずであるが、同時代の史料が乏しいために、それらの詳細な実態がよくわかっていない。

そこで本稿の目的は、中世末から近世にかけての御旅所の変遷とそれにとまなう祇園祭の変化の解明とする。具体的には、ある程度時代の幅を広げ、主に16世紀から18世紀までの史料を渉猟した上で、御旅所が移転した四条通寺町という場所の、祇園祭における意味も考えながら移転・統合の経緯や理由を考察し、ついで祇園祭における行事、特に御旅所で執り行われた諸行事が、中世末から近世を通じていかなる変化をみせたのかについて検討していく。以上のような祇園祭の歴史の解明を通じて、近世はもちろん、中世も視野に入れた京都における都市的な祭礼文化（史）の全体像を探る一助としたい。

II. 中近世祇園祭の神輿巡幸路

1. 中世の神輿巡幸路

神輿駐輦施設である御旅所の変遷を研究対象とする本稿において、最初に手がけておくべき手続

きは、祇園祭の神輿が渡御するルート（巡幸路）の復原である。さいわい祇園祭では、中世と近世との巡幸路を示す史料が残っているので、御旅所の移転・統合前後の比較が可能である。

まず中世の巡幸路であるが、明応9年（1500）、応仁の乱で中断されていた祇園祭を復興するために、室町幕府侍所開闔の松田頼亮が乱前後の祭礼の状況を記述した『祇園会山鉾事』に、次のように記されている。

祇園御さい礼の御道つたへ之事

大ま所（大政所）の御とをりハ、四条をにしへ烏丸まで、それを南へ御たみ所（御旅所）まで、くわんかう（還幸）の御時ハ、五条を西、大宮まで、それを上へ三条まで
せうしやうゐん（少将井）、おなしく四条を東のとゐん（東洞院）まで、其を上へ冷泉まで、御たみところ（御旅所）あり、くわんかう（還幸）の御とき、二条にしへ大宮まで、それを三条まで⁹⁾
（括弧内は筆者による、以下同じ）

この記述のうち、大政所および少将井と呼ばれる神輿が、祇園社からそれぞれの御旅所に至るまでが6月7日に行われた「神幸祭」「神輿迎」といわれる神輿渡御の巡幸路、その後が御旅所から神社に還御する6月14日の「還幸祭」の巡幸路である。なお、この記述では神輿が二基しかなかったかのようにも解されるが、実際には他に八王子と呼ばれる神輿もあって、大政所神輿と同じ巡幸路を渡御していた。

以上によって中世戦国期の神輿巡幸路はおおむね判明するが、完全ではない。というのは、還幸祭において、異なる御旅所から別々のルートを通して三条大路（三条通）と大宮大路（大宮通）の辻で合流した三基の神輿¹⁰⁾が、その後どのような経路を通して祇園社に還御したかが明記されていないからである。

対してこの問題を検討した河内は、16世紀に描かれたサントリー美術館所蔵『日吉山王・祇園祭礼図屏風』（サントリー本）祇園祭礼隻において、三条大路を西から東に向かう、神輿を中心とする還幸祭の行列の様子が描かれ、その先頭を行く乗牛風流¹¹⁾が三条大路と東京極大路（寺町通）の辻を右折して東京極大路を南下していることから、三条大路－東京極大路－四条大路（四条通）－祇園社という巡幸路を推定した¹²⁾。この推定そのものは筆者も支持するが、絵画史料における乗牛風流の描写だけで判断するのは少し根拠が弱いように思われる。なぜならば河内自身も述べているように、祇園祭における乗牛風流の動きは一定の道筋をもたなかったようであり¹³⁾、乗牛風流が還幸祭の行列の先頭に描かれているからといって、それが神輿渡御のルートを指し示しているとは断言できないように思われるのである。

よって筆者は、河内が推定した中世祇園祭における復原巡幸路の傍証として、『日吉山王・祇園祭礼図屏風』の描写に加えて、四条京極で執り行われていた「粟飯供御」神事存在をあげたい。この神事は、鎌倉期の13世紀末頃に著された『釈日本紀』に次のように記されている。

御霊会之時、於四條京極奉備粟御飯之由傳承、是蘇民将来之因縁也。又祇園神殿下有通龍宮穴之由、古来申傳之、北海神通南海神女子之儀符合歟¹⁴⁾

本史料によると、四条京極での粟飯供御神事は、祇園社の祭神、武塔神（牛頭天王の別名、記紀神話

の素戔鳴尊と同一視)が、南海に向かう旅の途中で蘇民将来という貧しい者から粟飯のもてなしを受けたとする説話に基づいている。すなわち、中世に広く流布されていた「牛頭天王縁起」¹⁵⁾に由来し、当時の説話が実際の祭礼行事にとりいれられていたことを示している点でも興味深い記述といえる。

粟飯供御神事は15世紀の『公事根源』¹⁶⁾、天文13年(1544)の『世説問答』¹⁷⁾、さらには、後述するように17世紀までの近世史料にも記述されているため、中世から近世初頭までの祇園祭においてきわめて重要な神事であったと推定されよう。

『釈日本紀』が著された鎌倉期には、現在のような祇園祭の山鉾巡行は成立しておらず¹⁸⁾、したがって四条京極で行われていた粟飯供御は、神輿渡御の際、神輿に奉戴された神霊に対して奉納されていたと考えられる。問題は、これが6月7日の神幸祭で行われたのか、6月14日の還幸祭で行われたのかであるが、おそらく後者であろうと推定される。なぜならば、中世史料において祇園祭が「祇園御霊会」と表記されるのは還幸祭の場合に限られているからである¹⁹⁾。後の史料になるが、明暦4年(万治元年、1658)の『京童』においても「祇園(中略)さて又蘇民将来は家まづしけれ共みこと(素戔鳴命)に宿をかし奉りあはの供御をそなへけるとなり、さればそのゆへをもて六月十四日のまつりに四條京極にて粟の神供をそなへ奉る也」²⁰⁾と明記されており、祇園祭の粟飯供御神事が、6月14日の還幸祭の日、四条京極において行われていたことは確実といえる。

裏をかえせば、6月14日には必ず神輿が四条京極まで渡御して立ち寄っていたと考えられよう。以上で中世祇園祭の還幸祭巡幸路は、河内が推定したように三条－東京極－四条－祇園社という復原ルートが実証できると思われる。

2. 近世の神輿巡幸路

ついで近世の巡幸路復原であるが、これは享保2年(1717)頃に成立した『京都御役所向大概覚書』において、次のように明記されている。

同日(6月7日)昼八時半時、祭礼、本社ヨリ神輿三基、四条通を西江、寺町旅所江神幸

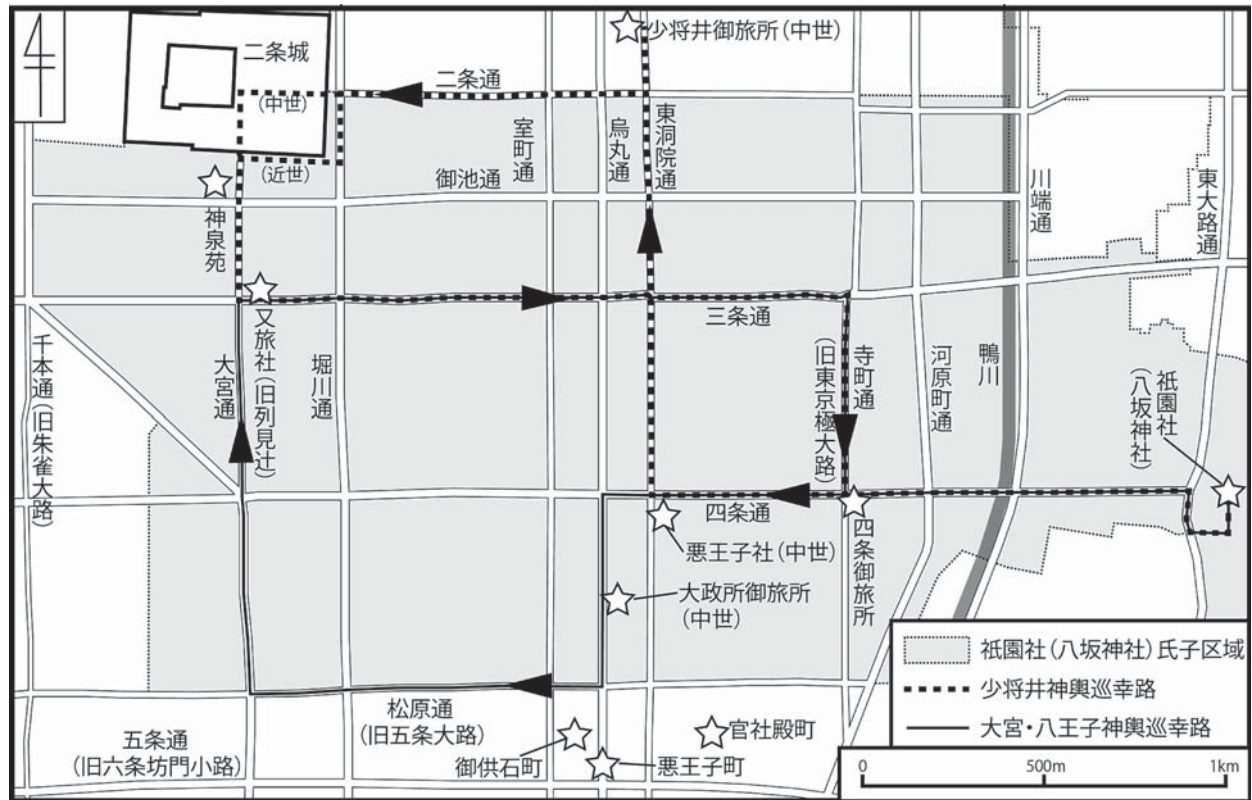
同日(6月14日)、祭礼、四条寺町之旅所ヨリ神輿三基共、四条通西江、東洞院ニ而少将井之神輿ハ東洞院ヲ北江、二条通ヲ西江、御城馬場を南、大宮三条御供所(現在の又旅社)迄、式基ハ四条西江、烏丸南江、松原通ヲ西江、大宮通北江、三条東江入ル御供所迄、此所ニ而御供を備へ、神輿三基共揃、三条通ヲ東江、寺町を南江、四条通を東、本社江帰座²¹⁾

本史料は、神輿が祇園社から御旅所へ渡御し、そして再び祇園社に還御する道筋を過不足なく記述しているので、そのまま用いることが可能である。

以上述べてきた復原巡幸路を地図化したものが第1図である。これをみれば明らかなように、祇園祭の神輿巡幸路は、中世と近世とではほとんど変化していないのである。先に述べたように、天正19年(1591)には御旅所が移転・統合されているにもかかわらず、その前後で変化した点といえば、御旅所の位置以外では、二条城築城にともなって少将井神輿の巡幸路が城を迂回するようになった程度に過ぎない。御旅所移転・統合の前後で神輿巡幸路がほとんど変化していないことは、祭礼という行事の本質を考える上できわめて重要な事実といえる。例えば、既にこの事実に着目した河内は、神輿渡御にとっては御旅所の場所以上に一定の巡幸路を渡御することに意味があったと指摘

した上で、祭礼時において、現実の都市空間とそこに居住する人々が認識していた都市空間とが乖離していた可能性を示唆している²²⁾。

ただ、巡幸路に限ると中世から近世にかけての変化はほとんどなかったが、神輿渡御において執り行われたそれ以外の諸行事では、御旅所の移転・統合による影響は少なからずあったと思われる。そこで次章以降、御旅所の移転・統合がいかに行われたのか、その経緯や理由を検討した上で、これによって変化した行事の詳細を考察していきたい。



第1図 中近世における祇園祭の神輿巡幸関係図
出所：各種資料より筆者作製

Ⅲ. 天正19年の御旅所移転・統合

1. 御旅所移転・統合の実態

はじめにでも述べたように、天正19年(1591)に祇園社御旅所の移転・統合が行われた史実を詳細に示す同時代史料はきわめて乏しい²³⁾。よってその実態は、時代が下った元和3年(1617)における以下の史料などに依拠しなければならない。

一、祇園御旅所大政所ハ、我等先祖助正御霊夢により、祇園牛頭天王助正屋敷へ神幸あつて、東洞院高辻屋敷四町まち、七百年はかりつたはりもちきたり申候処に、天正十九年に御宮ひきに、四町まちのかへの地として、北ハ四條道場のやふかきり(藪限り)、南ハ貞安のやふかきり、此間北南拾貳間、東ハ惣堀のといのきは(土居の際)まで、西東八拾間、徳善院より松田勝右衛門御奉行にて御渡しなされ候(以下省略)²⁴⁾

は明らかにできない。もちろん、寺町通に沿って移転させられた多くの寺院について、なぜその場所が移転先に選定されたのかという積極的な理由は見出せないようであり、祇園社御旅所についてもたまたま適当な空地が四条通沿いであったという可能性がないわけではない。

しかし、この問題を精査するために改めて第1図を参照すると、四条寺町の場所は、中世以前から神幸祭・還幸祭とも神輿巡幸路の途中にあることがわかる。先述のとおり、中世と近世とで祇園祭の巡幸路は本質的に変化しておらず、河内が指摘した神輿渡御にとっての巡幸路の重要性もあわせて考えると、四条寺町という場所が新たな御旅所の移転・統合先として選定されることは、祇園社や祇園祭を担う人々にとってみればきわめて合理的な判断であったと推定される。よって、御旅所の四条寺町への移転・統合理由としては、以前から神輿巡幸路の道筋にあたっていたため、何らかの配慮が働いてそこが積極的に選定されたという可能性が、ひとまず指摘できよう。

ところが、安土桃山期に限っては、必ずしもそのように移転・統合理由が速断できないのである。というのは、御旅所移転の直前に四条通が御土居建造によって封鎖されてしまったからである。当時の複雑な事情を説明するのは、天正19年2月の以下の史料である。

おほえ こんと御ふしんにつゐて、四てうとをり（四条通）のきおんくち（祇園口）ふさかせらるへきのよし、おほせいたさるゝと申のさた御入候、さやうに御入候へは、きおんのみこしのしんかうのミち（神幸の路）もなく、又ハ四てうくわんしやとの（冠者殿）よりのミやめくりの御さんけいもなり申さす候あひた、かのみちをハあけをかせられ候やう（以下省略）³⁰⁾

本史料の述べるところは、当時四条通から祇園社へ通ずる道が「御ふしん」（御土居建造）のために塞がれてしまうと、神輿渡御などにさしつかえが生ずるため、四条通を開放してもらえようというのを願うというものであった。

ここでは神輿巡幸において生ずる支障が訴えられているものの、御旅所への言及が特段ないことから、移転・統合の直前の状態を示しているものと考えられている³¹⁾。また、この時点ではまだ計画段階であったようだが、実際に御土居建造によって四条通が塞がれてしまったことは確かであり、「其後慶長六年ニ四條通之道を御明ケ被為成候ニ付、御旅所境内江道附キ申（候脱か）得者」³²⁾という記録があるように、10年後の慶長6年（1601）になって出入り口が開き、ようやく往来が可能となった。したがって、この間に限ると、祇園祭の神輿が鴨川を渡るルートは三条通か松原通（旧五条大路）が用いられていたのであろう³³⁾。

以上のような四条通の閉鎖という特殊事情を鑑みると、天正19年に四条御旅所が新設された理由とは、必ずしも祇園祭の神輿巡幸路の途中に位置していたからとは断言できないと思われる。

3. 冠者殿社について

それでは、四条寺町に祇園社御旅所が移転・統合された積極的理由とは、一体何であったのだろうか。この問題については、最近、河内が16世紀なかばの景観年代を示す米沢市上杉博物館所蔵『洛中洛外図屏風』（上杉本）下京隻に描かれた祇園祭を説明する中で、注目すべき指摘を行っている。すなわち当時の山鉦が、四条京極（寺町）の位置に描かれている小社、「くわちやとの」（冠者殿社）付近を巡行していることに関連して、「秀吉の時代になって、大政所御旅所と少将井御旅所がわざわざこの冠者殿の近くに移されたことを考えると、祇園会にとってはとりわけ重要な場所であったと

いえよう」³⁴⁾と述べている。つまり、河内は当地に御旅所が移転・統合する以前からあった冠者殿社の存在から、祇園祭における四条寺町という場所の重要性を示唆しているのである。そこで、しばらくこの小社の歴史および祇園祭との関係などを検討してみたい³⁵⁾。

冠者殿社（官者殿社）とは、下京区四条通寺町東入ル貞安前之町、すなわち四条御旅所の西側に隣接してある小社である。現在の冠者殿社は八坂神社の境外末社とされ、祭神も素戔鳴尊の荒魂を祀るとされている。中世における冠者殿社の記録は文献史料には見出せないが、絵画史料であれば、先に述べた『洛中洛外図屏風』上杉本下京隻において、四条京極の南東に小社が描かれ、そこに「くわちやとの」という書き込みもある。同小社は、上杉本よりも若干古い景観年代を示す東京国立博物館所蔵『洛中洛外図屏風』模本（東博模本）などにも描かれているため、16世紀の前半には現在の地に鎮座していた。

ところが、一方で下京区万寿寺通高倉東入ル官社殿町の町名は、かつて当町に冠者殿社があったことに由来するという説もある。例えば、宝暦12年（1762）の『京町鑑』には「官社殿町（中略）是今四條京極にある冠者殿社、元此町にありしゆへに名に残れり」³⁶⁾とあり、かなり時代は下るものの大正4年（1915）の『京都坊目誌』は、より詳しく「冠者殿社（中略）元烏丸通高辻の北、大政所町にあり〔同町一に官者殿町と云〕、天正十九年樋口〔万寿寺通〕高倉の東に移す、今尚官者殿町と云ふ（中略）慶長の初め、四條通旅所〔御旅宮本町〕に遷す（以下省略）」³⁷⁾（〔 〕内は割注、以下同じ）としている。

ちなみに冠者殿社のもともとの鎮座地が大政所町、すなわち祇園社の大政所御旅所と同一地にあったという説は、寛文5年（1665）の『扶桑京華志』も「冠者殿神社 旧在東洞院高辻、今在四條京極祇園斎場側、相伝禊祓誓辞之神也、土佐坊昌俊之霊也（以下省略）」³⁸⁾と記しているが、『洛中洛外図屏風』の描写を信用するかぎり、この説は史実とはいえない。

しかし、今も残る町名からみて、一時的に冠者殿社が官社殿町に遷座していたことは認めてもいいだろう。従って、冠者殿社は16世紀前半から四条京極に位置していたが、天正19年（1591）に官社殿町に遷され、慶長年間はじめには再び四条寺町（京極）に戻されたと考えられる。遷座の理由は、時期的にみて秀吉の京都改造施策によるものであろう。第2図などによれば、旧地に戻った冠者殿社は、長らく四条寺町南東に西向きに鎮座していたが、その後元治元年（1864）の大火以降、現在のように北向きに建てられたと考えられている³⁹⁾。

さて、次にこの冠者殿社がどのように信仰されていたかであるが、元禄2年（1689）の『京羽二重織留』には次のような説明がある。

官者殿 京極四條の辻に鎮座、俗に誓文返せいもんかへしの神と号す、世人偽誓のつみをすくひ給ふとぞ、是によつて商家売買の時に真偽をみだり神明を證としていつはりなきといへども、もと不実の事多之、其罪をおそれ毎年十月二十日洛中の諸人此社に参詣し、其科をまぬがる事をいのる、しかれども此神何の神と云事をしらず、世人あやまりて土佐房昌俊の社なりと云、昌俊はよしつねをたばかり追討使ならざるをちかひてたちまち神罰を蒙る、是によつて偽誓のつみをすくふとするものならん⁴⁰⁾

これによれば、当時の冠者殿社は「商家」を中心に、商売上の取引にかかわる「偽誓のつみをすくひ給ふ」神として信仰されていたこと、祭神名が明確でなかったことなどがわかる。その他の近

世地誌・名所案内記でも、おおむね同じである。ちなみに10月20日を同社の「誓文払い」の祭日として、多くの参拝者がお参りする風習は、現代でも残っている。

それでは、祇園社の御旅所が四条寺町に移転・統合された理由とは、河内が示唆したように、以前から当地に冠者殿社が存していたため、その由縁をもってのことなのであろうか。現在の冠者殿社は、確かに八坂神社の末社とされ、祭神も素戔鳴尊の荒魂を祀るとされている。しかし、17世紀までの地誌・名所案内記では、冠者殿社が祇園御旅所と隣接している関係で御旅所と一緒に項で説明されることが多いとはいえ、同社の祭神は不詳とされるなど、特に祇園社や祇園祭との関係にはふれられていない。一方先に紹介した、祇園社が御土居の建造による四条通閉鎖の中止を訴えた天正19年の史料には「四てうくわんしやとのよりのミやめくりの御さんけいもなり申さす候あひた」⁴¹⁾とは出てくるが、これは通が閉鎖されて不便になる一事例としてあげたのであって、必ずしも祇園社と関係があったから記されたとはいえない。

また、前述の通り、四条寺町に祇園社御旅所が移転・統合されたのと入れ替わるように冠者殿社が官社殿町に移転した事実も、後に旧地に戻されているとはいえ、冠者殿社と祇園社・祇園祭との関係が希薄であったことを意味していよう。

さらに、17世紀の地誌・名所案内記において、冠者殿社の祭日とされた10月20日に行われていた年中行事をみると、延宝4年(1676)の『日次紀事』では「洛中諸商夷祭」「四條京極冠者殿社参詣」⁴²⁾、貞享2年(1685)刊記の『京羽二重』では「ゑびす講」「誓文払 此日四條寺町土佐正尊のやしろまふで侍る」⁴³⁾、元禄2年(1689)の『京羽二重織留』では「洛中諸商人夷祭付四條昌俊宮誓文払」⁴⁴⁾とある。さらに宝暦12年(1762)の『京町鑑』には四条寺町の「官者祭」と猪熊松原上ルの「杉蛭子祭」とが併記された上で「凡洛中洛外の蛭子講をするは右両社の神事なりといふ」⁴⁵⁾とされており、当時、同日に福の神であるえびすを祭る風習があった。これは現代でも各地で広くみられる風習であるが⁴⁶⁾、元来疫病を引き起こす恐ろしい神として畏怖された祇園社の祭神、牛頭天王への信仰との共通性は見出しにくい。

以上のように、おそらく冠者殿社への信仰は、当初は祇園社との関係はあまりなく、京都の商人の間にあったえびす信仰に近い民俗信仰から派生したものではないかと推測される。それが17世紀になって祇園御旅所などと隣接した関係で、次第に祇園社が傘下に取り込んでいった可能性が高いのではないだろうか⁴⁷⁾。したがって、少なくとも冠者殿社が四条寺町に鎮座していたがゆえに、そこに祇園社の御旅所が移転・統合されたという明確な証左は見出せないといえよう。

4. 粟飯供御神事について

これまでの検討により、祇園御旅所の移転・統合先が四条寺町に選ばれた理由として、神輿巡幸路の途中にあること、冠者殿社が存していたことなどの可能性は低いことが明らかになった。そこでこの問題において改めてクローズアップされるのが、第2章第1節で指摘した粟飯供御神事の存在である。

その概要を確認しておく、粟飯供御の神事とは牛頭天王縁起に基づいていたこと、遅くとも鎌倉期の13世紀後半から連綿として行われていたこと、6月14日の還幸祭において四条京極(寺町)の辻で執り行われたことなどである。そして御旅所の移転・統合の後には、この神事が四条御旅所で行われていたことは、『京羽二重織留』の以下の記述からわかる。

粟飯 伝云むかし素戔鳴尊南海におもむき給ふとき、日くれしに宿を蘇民が家に借り蘇民家貧にして尊に粟の飯を供すと、依之也毎年祇園神事の日、京極四條御旅所にてあはの飯を神輿に供し奉る、是舊例也⁴⁸⁾

そもそも粟飯供御の神事が、なぜ四条寺町（京極）の辻で行われたのか、あるいはどういう人々なし組織が執り行っていたのかなどは、残された史料からはわからない。が、先に述べたとおり、祇園祭の中でも歴史が古く、由緒のある神事と認識されていたことは間違いなかろう。よって、それが行われる場所、すなわち四条寺町の確保は、祇園社ないし祇園祭を担う人々にとって重要な問題であったに相違ない。天正19年、御土居建造によって四条通が閉鎖された結果、神輿渡御にとってきわめて不便な事態となり、祭礼時に大きく迂回することを強いられながらも、四条寺町に新しい御旅所が定められた積極的な理由としては、そこできわめて重要な行事を行うためであったとしか考えられないのである。

以上検討してきたように、確定的な史料の裏付けはとれないものの、四条寺町という場所が祇園社御旅所の移転・統合先として選ばれた理由は、13世紀から行われていた粟飯供御という神事の執行のためであった可能性が高いと結論づけられよう。

ところが、近世初頭まで祇園祭の中で行われていた粟飯供御神事は、なぜか先に述べた元禄2年（1689）の『京羽二重織留』の記述を最後に確実な記録が途絶え、それ以降の地誌や名所案内記、それに祇園祭の手順などをかなり詳しく記述した祭礼案内記などでも記録が見出せなくなる。おそらく17世紀末から18世紀初頭にかけて、何らかの理由によって行事が廃絶したと考えざるをえないが、なぜ何百年も続いてきた由緒ある神事が廃絶してしまったのか、さまざまな史料にあたってみても確定的なことはまったくわからない。おそらくこの問題は、祇園祭の歴史の中でもかなり重要な未解明の問題と思われる。

ただ、近世の祇園祭において四条寺町の御旅所で行われていた行事は、粟飯供御神事に限られるものではなく、他にもいくつか重要な行事が行われている。それらはこれまで十分に考察されていないだけでなく、実態を明らかにすることである程度（御旅所が移転・統合される以前の）中世祇園祭の秘められた歴史を復原することができ、さらには粟飯供御神事が廃絶した事情もわずかに推測することが可能になると思われる。よって次章からは、近世四条御旅所で行われていた行事の実態を検討していきたい。

Ⅳ．四条寺町（京極）における神供行事の変遷

1. 神幸祭神供行事について

近世の祇園祭において、粟飯供御神事以外に御旅所で行われていた重要な行事としては、6月7日の神幸祭で執り行われる神供行事があった。当該行事の初見は、貞享元年（1684）の『菟藝泥赴』であり、さらに宝暦4年（1754）の『山域名跡巡行志』にはもう少し詳しい記述がある。ともに以下に示そう。

（6/7に）扱南の中門より神輿を出し奉り、石の鳥井の前より鳥井のあとをへて西大門の石の階の

もとに出て祇園の町をわたりて四條川の仮橋〔別に渡し〕をこして、神供所にて儀式有⁴⁹⁾

御供殿 在同所（祇園御旅所）東人家間、鳥居社〔南向〕六月七日祇園祭礼之時献神供、神供者
烏丸六条坊門北〔悪王子町〕町人持来備之、又雑色令呑酒等有儀式⁵⁰⁾

これらによれば、当該神供行事は、祇園社を出御した神輿が鴨川にかけられた四条仮橋を渡って御旅所に着御した際、「神供所」「御供殿」「御供所」などと呼ばれた施設で行われ、現在の下京区烏丸通万寿寺下ル悪王子町の町人が主体となって調進・奉納していたことがわかる。

まず「神供所」「御供殿」の位置であるが、享保8年（1723）の「御旅所境内絵図」（第2図）によれば、四条通北側にある「御本社」（旧大政所御旅所に相当）のさらに北に小さく「御供所」が描かれており、『山城名跡巡行志』などに記された位置と合致する。ついで、悪王子町が神輿に神供を調進する理由については、宝暦7年（1757）の祭礼案内記、『祇園会細記』に次のようにある。

神輿此所（御旅所）に至り給へば、御供殿より洗米を供す〔浄衣の社人、神輿一社に三つかミづ、洗米をなげうつなり〕、此謂古へ烏丸に御旅所有し時、四条東洞院に立石有、其所にて祝部^{はふり}御供を献ぜし古例也

四条東洞院東へ入立売西ノ町古名御神供町と云、東洞院四条下ル町元悪王子町といふ

今以洗米切^{きりぬさ}麻に榊葉を入れて神供船に載せ、是を頭にいたゞきたる女〔此女大仏より来る〕、また、風折烏帽子に白き絹の浄衣を着し乗物にのり神供の跡より来る人有、是神主代として、烏丸万寿寺通下ル悪王子町の行事役の人也、此人洗米を献ず⁵¹⁾

これによれば、祇園祭神幸祭における神供の由緒は、祇園御旅所の移転・統合前、四条東洞院辻の東に接する立売西町および南に接する元悪王子町で執り行われていた行事までさかのぼるといふ。ただ、これだけではわかりにくい部分もあるので、ひとまず元悪王子町や悪王子町の名の由来ともなり、祇園祭とも深い由縁があった小社、悪王子社の歴史を追っていくことを通じて、神幸祭神供行事の実態を考察していこう。

2. 悪王子社と祇園祭について

悪王子社は、現在は八坂神社の境内摂社としてあり、祭神は冠者殿社と同じく素戔鳴尊の荒魂とされている。その創祀は不明だが、『山城名跡巡行志』、『京町鑑』および『京都坊目誌』によれば、もともと下京区東洞院通四条下ル元悪王子町に鎮座していたが、秀吉の命によって天正年間（1573～92）の頃に悪王子町へ遷され、次いで慶長元年（1596）に四条寺町の四条御旅所へ遷されたという⁵²⁾。

確かに『洛中洛外図屏風』上杉本下京隻には四条東洞院辻の南、つまり現在の元悪王子町の北側に「あくわうじ」と記された小社が描かれているため、16世紀なかばには悪王子社が同地にあったことは間違いない。また、先行研究ではその鎮座地を東洞院の西側と解しているが⁵³⁾、サントリー本祇園祭礼隻には東洞院の東側に悪王子社と思われる小社が西を向いて描かれ、後述する『京都坊目誌』の記述からも、当時の悪王子社は四条東洞院辻南東に鎮座していたと思われる。

また、悪王子社が元悪王子町にあった当時、祇園祭神幸祭の日に四条東洞院の辻において神供行事が行われていたかどうかは、同時代の中世史料では確認ができない。しかし、正徳元年（1711）の『山州名跡志』には「元悪王子町 在同街（東洞院）四條南、始有此地悪王子社、古六月七日祇園会

三基ノ神輿遷幸の時、於此辻神供ヲ献スルコト旧例ナリ」⁵⁴⁾とあるほか、『京都坊目誌』でも「悪王子社址 元悪王子町東側より立売西町に延及する地とす」とした上で、その東隣にある下京区四条通東洞院東入ル立売西町については「中古神輿石町とも呼ぶ〔慶安地図〕、町の西南の方に祇園祭礼の日、神輿を駐め、神饌を供する古例あり、恒に其位置を保つ為め、標石を以て路面に印せしを以てなり」としている⁵⁵⁾。確かに立売西町は、寛文5年(1665)の『京雀』において「御供」が転訛した名前と思われる「みごく町」とも表記されているので⁵⁶⁾、16世紀の祇園祭神幸祭では、四条東洞院辻の東側において神輿への神供行事が執り行われていたという史実はおおむね認められると考えられる。また、近世の行事では、一時的に悪王子社が遷座していた悪王子町の町人が神供の調進主体であることから、中世の当該行事が悪王子社との関連で行われていた可能性も高いといえよう。

ちなみに悪王子社は、神輿渡御の神幸祭だけでなく、山鉾巡行においても重要な役割をはたしていた。例えば先の『祇園会細記』には次のような記述がある。

御旅所の斎竹建る事(中略・5/29夜に御旅所の西に立てる斎竹の一本は)泉涌寺中来迎院より立る、是悪王子社のしめ也、悪王子社泉涌寺支配ゆへ也、此社、古へ四条東洞院に有し也、其注縄を長刀杵参入の時切て通し古例ゆへ、今以四条白山通(麴屋町)に至れば切とく例也⁵⁷⁾

これは、現代の祇園祭山鉾巡行でも四条通麴屋町で実施されている長刀鉾の注連縄切行事が悪王子社に由来し、中世では同社があった四条東洞院の辻で行われていたことを示す注目すべき記録である(ただし、現在の行事は昭和になって始められたもの)。おそらく先のサントリー一本において、悪王子社の北、四条大路の南に描かれた一本の細い竹が、当時の注連縄を張っていた斎竹ではないだろうか。

さらに、下京区四条通東洞院西入ル長刀鉾町が所蔵する『大政所御旅所絵図』は、天保3年(1832)に作り直されたものであるが、天正年間以前、移転前の大政所御旅所景観を西から描いているとみられる⁵⁸⁾。そして本絵図の左上には元悪王子町の悪王子社があり、その境内において長刀鉾の長刀を参詣者に拝戴させている場面⁵⁹⁾が描かれていることから、悪王子社と祇園祭、とりわけ長刀鉾との関係は、遅くとも中世末の16世紀にはきわめて深いつながりにあったといえよう。また、あわせて中世祇園祭における四条東洞院辻という場所の重要性も浮き彫りになったと思われる⁶⁰⁾。

3. 四条御旅所における悪王子社と御供所との関係

さて、中世までさかのぼる悪王子社と祇園祭との深い関係が明らかになったところで、再び近世の四条御旅所で行われていた6月7日神供行事に焦点をあてることにしよう。これまでの検討から、当該行事は、中世末に四条東洞院辻の手前で神幸祭の神輿三基が留まって神供を受けた行事が、御旅所の移転・統合後に場所を変えて引き継がれたものであり、それは悪王子社との由縁をもって行われることはおおむね確かといえる。

その上で確認しておきたいのは、慶長元年、悪王子社が四条御旅所に遷された際の位置である。例えば『菟藝泥赴』に「悪王子社 官者殿の南西にいます小社なり」⁶¹⁾と記されているように、近世の悪王子社が四条通の南側、冠者殿社の西隣に鎮座していたことは、『山州名跡志』、『山域名跡巡行志』、『京町鑑』などの記述からも間違いはない。よって第2図において、「冠者殿神楽所」の西に描かれている「末社」が悪王子社であったと考えられる。ちなみにその位置は、後世の明治2年(1869)

の段階でも変わっていなかった⁶²⁾。

しかし、ここで問題になるのは、四条通寺町南側の悪王子社と北側の御供所との関係である（第2図）。なぜならば、近世の神幸祭神供がかつて四条東洞院にあった悪王子社との由縁で行われるのであれば、当該行事は四条通南の悪王子社前で執行されるべきものではないだろうか。ところが、わざわざ別の施設である御供所が用いられていることに対して疑問が生ずる。もちろん、行事を準備するためなどの理由から、悪王子社とは別の建物が建てられて執り行われたという解釈もありえよう。が、単純にそう解釈できないのである。なぜならば、悪王子社と御供所とはもともとつながりがなかったことを示す当時の記録がいくつかあるためである。

まず、享保12年（1727）7月10日付「山本大蔵悪王子額上由緒届書案」（以下「由緒届書案」）⁶³⁾の存在があげられる。本史料は、近年御旅所御供所の「普請」があった際、新たに「悪王子」という額が上げられたが、吟味した結果、御供社は古来より「立石殿」と称されており、「悪王子之社」とは伝えられてきていない旨、「祇園社社代 山本大蔵」が「御奉行様」へ申し伝えたという書状である。

貞享元年（1684）の『菟藝泥赴』の記述にあったように、当時の御供所では、神幸祭の際に神輿へ神供を奉納する行事が行われていた。また、宝暦5年（1754）の『山域名跡巡行志』以降の諸記録によれば、その行事では悪王子社と由縁のある悪王子町の町人が神供を調進していたことも間違いはない。ところが、享保12年の「由緒届書案」によると、当時の祇園社では、もともと御旅所境内の御供所と悪王子社とは無関係だと認識していたことになる。これはどういうわけであろうか。「由緒届書案」の内容から、少なくとも17世紀末から18世紀初頭にかけて、それまではつながりがなかった御供所と悪王子社を結び付けようとする、何らかの意図的な動きがあったという推定は可能であろう。

次に正徳元年（1711）の『山州名跡志』では、「祇園祭礼御供所」の項に「此所件ノ神輿遷幸ノ時、神供ヲ献ズル也、此社他町ヨリ預ル、神供ハ則彼町ヨリ調備ス、其所烏丸通五條上号御供町也」⁶⁴⁾とある。しかし、「烏丸通五條上号御供町」を比定するにあたって、「烏丸通五條上」をそのまま理解すれば確かに悪王子町となるのだが、管見の限り、近世史料で悪王子町が「御供町」と表記されることはなく、以下に述べるように、その北西に接する御供石町を指している可能性も捨てきれない。

さらに宝暦12年（1762）の『京町鑑』には、「万寿寺通（中略）大堀町・御供町（中略）此町祇園会に四條御旅所の御供殿へ御供を上る古例也」⁶⁵⁾と明記されている。他の史料では、当時の御供所における神幸祭神供行事の調進主体が悪王子町であることは確実であるにもかかわらず、『京町鑑』が異なる調進主体、すなわち現在の下京区万寿寺通烏丸東入ル大堀町と西入ル御供石町を指し示しているのは一体なぜであろうか。

以上のように、近世の諸史料において、御供所に関する記述内容はきわめて錯綜している。筆者においては、この錯綜した状況を明瞭に解き明かす史料上の証左は見出せておらず、これ以降は推測を交えた解釈・仮説とならざるをえない。そのような推測は不毛という批判もあるかと思われるが、ひとまず筆者の解釈と仮説を提示しておくことは、今後この問題を考察する際の一助ともなるであろう。よって本稿の最後に現時点でのそれらを提示し、諸賢のご批判を仰ぎたいと思う。

4. 御旅所御供所における神供行事の消長

まず注意すべきは、その名からわかるように、『京町鑑』に記された御供石町にも祇園祭において神供を調進していたという伝承がある点である。例えば井上頼寿は、当町の由緒を次のように記している。

祇園祭御供石 江戸時代まで祇園祭のときには御旅所に御供を献ずるための台石があった。三カ所あってみな御供石^{いし}といったと伝えられている。そのうちの 하나가下京区万寿寺通り烏丸西入る北側の民家の内にあった。同所を御供石町と呼ぶのもそのためであるが、昭和六年に家の人が代ったとき、四条坊城、元祇園柳神社の境内東北の隅へ移した。注連を張って神聖視されている⁶⁶⁾

井上の指摘通り、「御供石」は中京区四条通坊城西入ル壬生柳ノ宮町の元祇園柳神社境内に現存しており、筆者の聞き取り調査でも同石が御供石町内にあったことを確認済である（第3図）。また、寛永14年（1637）の『洛中絵図』では、当町は「みこく石丁」と記されており⁶⁷⁾、それ以前から「御供石」の由緒をもつ町だったのであろう。以上のように、「御供石」という物証、17世紀前半にさかのぼる町名などから、かつての御供石町が祇園祭において神供を調進する町の一つであったことは認められるであろう。

しかし、具体的にいついかにして同町から神供が調進されていたのかはよくわからない。また、祇園祭の詳細な手順を記した宝暦7年（1757）の『祇園会細記』に御供石町関連の記述がない以上、おそらくそれまでに廃絶していたと考えられる。対してその5年後の『京町鑑』において、御供石町などが御供所に神供を調進しているとなっている理由は、既に廃絶していたが、比較的近年まで存続していた行事であるがゆえに（ある意味誤って）記述されたとしか解釈ができないであろう。

一方、御旅所の移転・統合後、遅くとも17世紀後半には四条御旅所境内の御供所において悪王子町が調進し、悪王子社との由縁がある神幸祭神供行事が行われていたが、もともと御供所は悪王子社と無関係の施設であったか考えると、（悪王子町とは別に）御供石町が調進していた神供行事のために用いていた可能性が指摘できる。本来の御供所が「立石殿」と称されていたことも、御供石町との関連を示唆していよう⁶⁸⁾。さらに推測を重ねれば、廃絶した時期の共通性から、御供石町による神供行事とかつての栗飯供御神事と



第3図 元祇園柳神社境内の御供石
出所：筆者撮影

の関連も指摘できるのではないだろうか。

だとすれば、本来、6月14日の還幸祭に御供所で行われていた神供行事が、17世紀末から18世紀初頭にかけて何らかの理由で廃絶したゆえに、6月7日の神幸祭で神供行事を行う悪王子町が、御供所を独占的に使用するようになったのであろう。これを契機として、享保12年(1727)には「悪王子」の額を掲げ、御供所への支配を確固たるものにしようとしたのではないかと推測される。その結果、安永9年(1780)の『都名所図会』に「悪王子社 御旅所北側にあり、祇園会神輿臨幸のとき、烏丸通り五条の北、悪王子町より古例によつて神供を備ふ」⁶⁹⁾とあるように、次第に御供所イコール悪王子社そのものとみなされるようになったと考えられよう。

悪王子町による神幸祭神供行事は、文久3年(1863)の『花洛羽津根』にも記されているが⁷⁰⁾、その後は史料上見出せなくなり、明治2年(1869)の四条御旅所を描いた絵図では、御供所の建物そのものが「小宮 稲荷社」となっている⁷¹⁾。おそらくこの神供行事も、幕末の混乱で廃絶したのではないだろうか。

V. おわりに

本稿で明らかになったことは、主として以下の通りである。第一に、中世の祇園祭還幸祭における神輿巡幸路は、6月14日の粟飯供御神事を行う四条京極(寺町)を經由していた。第二に、天正19年、祇園社の御旅所移転・統合において四条寺町という場所が選ばれた理由も、当該神事を執行するためであった可能性が高い。第三に、粟飯供御神事は17世紀末から18世紀初頭にかけて廃絶した。第四に、中世の神幸祭や山鉦巡行では、6月7日の四条東洞院辻にて悪王子社と由縁のある重要な行事が行われていたが、近世におけるそれらは四条御旅所に場所を変えて執り行われるようになった。第五に、近世以降の悪王子社にちなむ神輿神供行事は御旅所内の御供所で行われていたが、御供所はもともと悪王子社との関係はなく、本来は別の行事のための施設であった。その行事とは粟飯供御神事であった可能性も指摘できる。

以上の考察を通じて、御旅所の移転・統合などを契機に生じた、中世末から近世にかけての祇園祭における諸行事などの変化が明らかになるとともに、中世祇園祭の秘められた実態もおぼろげながらうかがい知れるようになったといえよう。

一方、多くの残された課題もうきぼりになった。近世であれば、最大の問題といえる粟飯供御神事廃絶の経緯や理由、御旅所御供所をめぐる諸行事のより詳細な実態や変遷などの解明が不可欠であり、そのためには本稿で主に取り上げた地誌・名所案内記類ばかりでなく、例えば悪王子町や御供石町といった町々に残された諸史料の解説も求められよう。さらには、中世祇園祭における重要性が推定された四条東洞院という場所に関して、同時代史料による実態の解明も喫緊の課題である。

最後に付言すれば、京都という都市の祭礼文化(史)の全体像を検討するにあたっては、祇園祭以外の諸祭礼の考察もおろそかにすることはできない⁷²⁾。今後は、豊富かつ良質な史料が多く残る祇園祭の研究成果に安んずることなく、並行してそれ以外の祭礼の研究も進めていく必要があろう。

注

- 1) ①脇田晴子「中世の祇園会—その成立と変質—」、藝能史研究4、1964、11-28頁、②脇田晴子『中世京

- 都と祇園祭一疫神と都市の生活』、中央公論新社、1999。
- 2) ①河内将芳『中世京都の都市と宗教』、思文閣出版、2006、②河内将芳『祇園祭と戦国京都』、角川学芸出版、2007、③河内将芳『祇園祭の中世一室町・戦国期を中心に』、思文閣出版、2012、④河内将芳『絵画史料が語る祇園祭一戦国期祇園祭礼の様相』、淡交社、2015 など。
 - 3) 川嶋将生『祇園祭一祝祭の京都』、吉川弘文館、2010 など。
 - 4) 植木行宣『山・鈴・屋台の祭り一風流の開花』、白水社、2001 など。
 - 5) 山路興造『京都 芸能と民俗の文化史』、思文閣出版、2009 など。
 - 6) 八坂神社は、慶応4年(明治元年、1868)にそれまでの祇園社から改称された。よって、本稿でも時代に応じて神社の呼称を使い分ける。
 - 7) 四条御旅所の概要については、村上忠喜「祇園御旅所今昔」(京都市文化市民局文化財文化財保護課編『京都市の文化財(第22集)』、京都市文化市民局文化財文化財保護課、2004)、30-32頁を参照。なお、現在のように四条通南側に御旅所施設が集約されたのは明治45年(1912)、四条通拡幅工事によるものであり、それ以前は四条通の南北に分散し、御旅宮本町にあった。
 - 8) 瀬田勝哉「中世の祇園御霊会一大政所御旅所と馬上役制」(瀬田勝哉『洛中洛外の群像一失われた中世京都へ』、平凡社、1994)、223-288頁(初出は1979)。
 - 9) 『祇園社記』第十五(竹内理三編『増補続史料大成第四十五巻 八坂神社記録三』、臨川書店、1978、192頁)。
 - 10) 神輿が合流する三条大宮の辻は、康和5年(1103)以降、「列見辻」と呼ばれて祇園祭の神輿渡御における重要なポイントであったと考えられている(『本朝世紀』康和5年6月14日条など)。現在でも同地に又旅社と呼ばれる八坂神社境外末社があり、祭の際には各神輿が立ち寄って神事が行われている。列見辻および又旅社については、本多健一「祇園祭と神泉苑一その実態と言説の変遷一」、藝能史研究207、2014、15-33頁などを参照。
 - 11) 乗牛風流とは「牛に乗り、滑稽なほど巨大な冠をかぶり、両袖になにかを通してピンと左右にはり、両手は、衣の脇から前へ出して笏を握るという不思議な格好」(泉万里『扇のなかの中世都市一光円寺所蔵「月次風俗図扇面流し屏風」一』、大阪大学出版会、2006、52頁)をした中世祇園祭の出し物である。乗牛風流については、河内将芳「乗牛風流と鶴鈴についての考察」(前掲2)③、261-279頁)(初出は2011)などを参照。
 - 12) 前掲2)④、61頁。
 - 13) 前掲2)④、61-63頁など。
 - 14) 黒板勝美編『新訂増補国史大系 第八巻 日本書紀私記・釈日本紀・日本逸史』、吉川弘文館、1999、106頁。
 - 15) 牛頭天王縁起に関する研究は、①西田長男「『祇園牛頭天王縁起』の成立」(柴田實編『御霊信仰』、雄山閣出版、1984)、129-206頁(初出は1966)が代表的である。最近では②鈴木耕太郎「スサノヲと祇園社祭神一『備後国風土記』逸文に端を発して一」、論究日本文学92、2010、55-72頁がある。
 - 16) 関根正直編『修正公事根源新釋』、第一書房、1986、下巻46-48頁。
 - 17) 『群書類従・第二十八輯 雑部』、続群書類従完成会、1979、676-677頁。
 - 18) 祇園祭山鈴巡行の成立については、前掲2)および5)などの諸研究を参照。
 - 19) 前掲2)②、40頁など。
 - 20) 新修京都叢書刊行会編『新修京都叢書第1巻』、臨川書店、1967、12頁。
 - 21) 岩生成一監修『京都御役所向大概覚書』下巻、清文堂出版、1973、20-22頁。
 - 22) 河内将芳「中世の祭礼と都市空間一祇園会神輿渡御と御旅所を素材に一」(前掲2)③、152-155頁)(初出は2006)。河内の示唆は、現実空間と空間認識との違いを探求する歴史地理学にとっても有益と思われる。
 - 23) 祇園社御旅所の移転・統合に関する先行研究として、①土本俊和「近世京都における祇園御旅所の成立と変容一領主的土地所有の解体と隣接境界線の生成」、日本建築学会計画系論文集456、1994、227-235頁、②前掲22)などがある。
 - 24) 『祇園社記第二十三』元和3年3月13日条(竹内理三編『増補続史料大成45 八坂神社記録三』、臨川書

- 店、1978、316 頁)。
- 25) 『祇園社記第二十三』所収、享保 8 年(1723)11 月 9 日付「祇園社御旅所境内絵図」(前掲 24)、330-331 頁)。
- 26) 安土桃山期京都の人口増加や市街地開発の状況については、①小川保「天正・文禄期の京都の町一大中院文書による概観」、京都市史編さん通信 251、1993、1-4 頁、②杉森哲也「聚楽町の成立と展開—近世初期京都都市構造の再検討—」、年報都市史研究 3、1995、91-116 頁、③横田冬彦「近世社会の成立と京都」、日本史研究 404、1996、50-70 頁、④土本俊和「小屋がけによる町—聚楽第建設に促された天正末京都の都市形成」、日本建築学会計画系論文集 500、1997、221-228 頁などを参照。
- 27) 高橋康夫・吉田伸之・宮本雅明・伊藤毅編『図集日本都市史』、東京大学出版会、1993、131 頁など。
- 28) 前掲 27)、142-143 頁など。
- 29) 当時の京都における主要な神社施設としては、他に下御霊社(下御霊神社)、上下御霊社御旅所、稲荷御旅所が、都市改造にともなう移転・統合の対象とされた。このうち上下御霊社関連の移転・統合については、本多健一「一六世紀の御霊社・御霊祭と都市空間」(本多健一『中近世京都の祭礼と空間構造—御霊祭・今宮祭・六斎念仏—』、吉川弘文館、2013)、86-110 頁参照。
- 30) 『祇園社記第二十三』所収、天正 19 年 2 月 9 日付「祇園執行書状案」(前掲 24)、315 頁)。
- 31) 前掲 23) ①、230 頁。
- 32) 『祇園社記第二十三』享保 8 年(1723)11 月 8 日条(前掲 24)、328 頁)。
- 33) 前掲 2) ④、42 頁。
- 34) 前掲 2) ④、101 頁。
- 35) 冠者殿社の歴史に関する先行研究には、下坂守「中世「四条河原」考—描かれた「四てうのあおや」をめぐって—」(下坂守『中世寺院社会と民衆—衆徒と馬借・神人・河原者—』、思文閣出版、2014)、311-339 頁(初出は 2010)がある。
- 36) 新修京都叢書刊行会編『新修京都叢書第 3 巻』、臨川書店、1969、285 頁。
- 37) 新修京都叢書刊行会編『新修京都叢書第 20 巻』、臨川書店、1970、348 頁。
- 38) 新修京都叢書刊行会編『新修京都叢書第 22 巻』、臨川書店、1972、40 頁。
- 39) 前掲 7)。
- 40) 新修京都叢書刊行会編『新修京都叢書第 2 巻』、臨川書店、1969、404-405 頁。
- 41) 前掲 30)。
- 42) 新修京都叢書刊行会編『新修京都叢書第 4 巻』、臨川書店、1968、420 頁。
- 43) 前掲 40)、76 頁。
- 44) 前掲 40)、357 頁。
- 45) 前掲 36)、171 頁。
- 46) 福田アジオ・新谷尚紀・湯川洋司・神田より子・中込睦子・渡邊欣雄編『日本民俗大辞典 上』、吉川弘文館、1999、208-209 頁。
- 47) 管見の限り、冠者殿社と祇園社との関係を明示する記録は、正徳元年(1711)の『山城名勝志』に「官者殿 元在烏丸樋口南下官者殿町、今遷京極四條南、祇園末社、十月二十日祭之」(新修京都叢書刊行会編『新修京都叢書第 14 巻』、臨川書店、1971、203 頁)とあるのが初見である。
- 48) 前掲 40)、395-396 頁。
- 49) 新修京都叢書刊行会編『新修京都叢書第 12 巻』、臨川書店、1971、294 頁。
- 50) 前掲 38)、249 頁。
- 51) 藝能史研究会編『日本庶民文化史料集成 第二巻 田楽・猿楽』、三一書房、1974、425-426 頁。
- 52) 前掲 38)、249 頁、前掲 36)、193 頁および前掲 37)、302-303 頁など。その後の悪王子社は、明治 10 年(1877)になって八坂神社境内に遷され、さらに平成 10 年(1998)には、元悪王子町に新たな祠が建てられて分霊が迎えられ、400 年以上の歳月を経て同町内に「里帰り」している。
- 53) 山田邦和『京都都市史の研究』、吉川弘文館、2009、207 頁など。
- 54) 新修京都叢書刊行会編『新修京都叢書第 16 巻』、臨川書店、1969、141 頁。
- 55) 前掲 37)、302・308 頁。

- 56) 前掲 20)、252 頁。
- 57) 前掲 51)、421-422 頁。他に同記の長刀鉾の由来に関する部分や、『松原中之町文書』（『史料京都の歴史』所収）でも同じ内容の記述がある。なお、近世の悪王子社を支配していた泉涌寺来迎院（現東山区）との関係については今後の課題としたい。
- 58) 前掲 7)。
- 59) 悪王子社における長刀拝戴行事の由来については、若原史明『祇園会山鉾大鑑』、八坂神社、1982、12-13・71 頁などを参照。
- 60) 例えば『祇園執行日記』観応 3 年（文和元、1352）5 月 29 日条によれば、四条東洞院には「神事所」があったという（京都市編『史料京都の歴史第 12 巻下京区』、平凡社、1981、146 頁）。中世祇園祭における四条東洞院の意味について、詳細は今後の検討課題としたい。
- 61) 前掲 49)、248 頁。
- 62) 『永松小学校所蔵文書』「明治二年下京拾貳番組貳拾町々亀絵図」（前掲 23）①、231 頁）。
- 63) 八坂神社文書編纂委員会編『新編八坂神社文書（第一部）』、臨川書店、2014、224 頁。
- 64) 前掲 54)、301 頁。
- 65) 前掲 36)、284-285 頁。ちなみに「悪王子町」の項には、悪王子社の旧地という説明はあるが、御旅所御供所との関係は記されていない。
- 66) 井上頼寿『改訂 京都民俗志』、平凡社、1968、92 頁（初版は 1933）。
- 67) 宮内庁書陵部編『洛中絵図』、宮内庁書陵部、1969。
- 68) もちろん、立売西町の「立石」との関連も捨てきれない。いずれにしても井上が指摘したように、祇園祭に関係する「御供石」は複数あり、そのうちの二つが御供石町と立売西町とに別々にあったとみてさしつかえあるまい。
- 69) 市古夏生・鈴木健一校訂『新訂都名所図会 I』、筑摩書房、1999、111 頁。ちなみに四条通南の本来の悪王子社は、御旅所の挿絵に「役行者」として描かれている。
- 70) 新撰京都叢書刊行会編『新撰京都叢書第二巻』、臨川書店、1986、211 頁。
- 71) 前掲 62)。
- 72) 前掲 29)、58-59・134-135 頁および本多健一『京都の神社と祭り一千年都市における歴史と空間』、中央公論新社、2015、1-6 頁など。

（本学歴史都市防災研究所客員研究員・非常勤講師）

About Shijo *Otabisho* in the *Gion Matsuri Festival*

by

Ken'ichi Honda

The *Gion Matsuri* is not only a major urban festival in Kyoto but also an important aspect of the cultural history of festivals in Japan. In this article I consider the transition of the *Gion Matsuri* from the end of the Middle Ages to the early modern period (16th–18th century). In particular, the reason why the *Otabisho*, a facility that served as a resting point for the *Mikoshi* (portable shrine), was moved/unified to Shijo-Teramachi is elucidated. Also, the changes that festive events experienced due to the abovementioned movement/unification are considered.

It is pointed out that the ritual of offering Awameshi (millet rice), that had been celebrated on June 14 since the 13th century, held much importance. It is likely that the *Otabisho* was moved/unified in order to celebrate this ritual, although it subsequently disappeared around the late 17th and early 18th century. Meanwhile, after the movement/unification of the *Otabisho*, the *Mikoshi* ritual that had been celebrated in Shijo-Higashinotoin on June 7 changed its venue and was celebrated in Shijo-Teramachi.

The above analysis sheds light on the changes that festive events experienced as a result of the movement/unification of the *Otabisho*, and also reveals aspects of the hidden reality of the *Gion Matsuri* in the Middle Ages.